

文化財を災害からまもる

西山 要一

Yoichi Nishiyama

文学部

地震・台風などの自然災害ばかりでなく、戦争・宗教対立・放火・盗難などの人的行為による文化財の破壊は、現在も絶え間なく、世界中で見られる。ここ数年においても、パーミアンの大仏の爆破、旧ユーゴスラビアのボスニア・ヘルツェゴビナの民族戦争による教会・モスクの破壊、日本の鳥取県西部地震、広島県芸与地震による神社や灯籠等の倒壊、東大寺戒壇堂の火災等々、枚挙に暇がない。戦争時であれ、平時であれ、文化財は自然災害・人為的災害の驚異に常にさらされていると言える。

しかしながら、文化財を災害からまもるための体系的な理論、災害予防の工学、災害時の救援工学（救援方法・救援ネットワーク）などは確立されていない。文化財の保存と活用・継承についての学問分野である「保存科学」にこうした、いわば「文化財防災学」の確立をめざすのが、本研究の目的である。

本件究において調査・研究を行った文化財災害調査の2件について以下に概略を記す。

1 1998年台風7号による文化財被害

1998年9月22日に近畿地方を縦断した台風7号は、近畿6府県の国・府県指定文化財に多大の被害をもたらした。近畿各府県教育委員会の集計によると、奈良県117件、大阪府48件、兵庫県13件、京都府44件、滋賀県39件、和歌山県19件のあわせ280件の国および府県指定文化財の被害が報告されているが、市町村指定文化財や未指定の貴重な文化財を含めると膨大な被害数である。

奈良県では、春日大社・霊山寺・薬師寺・石上神社・長谷寺・法隆寺・当麻寺・百濟寺・室生寺・金峯山寺などの89件の建造物の屋根や壁に被害があった。これらは国県指定建造物件数の25%、棟数の17%にあたる。他に栄山寺石灯籠など美術工芸品の被害4件、吉野山の桜・玉置山の杉・春日山原生林などの樹木の倒壊など史跡・名勝・天然記念物の被害は15件などであった。文化財の被害は強風の直撃と、倒木による被害があるが、文化財周辺の整備や補強の必要性を痛感させる災害でもあった。

2 奈良県の地震による文化財被害

奈良の文化財の地震被害記録の幾つかを抜粋すると、1096年（永長1）の東大寺釣鐘の落下、薬師寺回廊の倒壊、1494年（明応3）の東大寺・興福寺・薬師寺・西大寺等の破損、1596年（慶長1）の慶長伏見地震の唐招提寺戒壇と僧堂の倒壊、金堂・講堂・東塔の破損、法華寺・

海龍王寺の大破、般若寺十三重石塔の相輪と上層の落下、1605年（慶長10）の興福寺・法華寺破損、1819年（文政2）の春日大社石灯籠の8割の転倒、1854年（嘉永7）の伊賀上野地震の寺社の石灯籠すべての転倒、1936年（昭和11）の河内大和地震の法隆寺などの土塀の破損、1946年（昭和21）の春日大社石灯籠300基の転倒、1952年（昭和27）の吉野地震の春日大社灯籠650基転倒。そして、1995年の兵庫県南部地震（阪神・淡路大震災）の蓮城寺阿弥陀如来像や法隆寺聖徳太子二才像の破損などがある。

奈良ではこれから30年以内に5%の確率でマグニチュード7以上の直下型地震にみまわれることが予想されている。国宝や重要文化財のみならず、身近にある貴重な文化財を調査・登録し、台風や地震などの災害に備えて補強・強化等の予防措置を万全に実行し、被害が発生した時の迅速な調査と的確な救出などの救援体制を確立し、救出した文化財の価値を失することのない修理方法と理念を考え、必要な資金を確保しておくことが肝要である。

なお、本研究の詳細な報告は別途行う予定である。